

里の「人間多様性」と地域づくりの可能性

山形県内陸北部に位置する角川の里は、東北の雪国の典型的な農山村と言える。その豊かで多様な自然環境は、長い年月をかけて里の人々が手をかけ、つくりあげてきた「自然」だ。

集落を取り巻く里山は湧水地が手入れをされ、ため池が数多く作られ、それらを連絡する数多くの水路が棚田や里の集落へと接続している。これは先人がそこに住まうための「インフラ整備」として行ったものだ。その結果形成された多様な水辺にはサンショウウオをはじめとする多様な生物が生息している。

一方、里山の木は炭焼き、植物は生活用品の材料、あるいは薬として利用され、山菜やきのこなどで郷土料理が作られる。里山という自然が里の生活文化の基盤となっているわけだ。このような生活文化を営むため、人々は里山に入り、適度に木を切ったり、植物を採取したり、あるいは植えたりする。このことが自然環境へ良い意味で攪乱作用をもたらし、植物層の更新を早めたり、多様な植物層を育むことになると同時に、多様な動物層を育むことにつながる。

このように角川の里では、自然と生活文化は一体となって織りなされ、豊かな生物多様性が生まれ、その営みの中で人々が「生息」している。東北の農村の美しい景観には、多くの生物が一つの循環の中で営むことができる多様で多元的な価値が存在しているのである。

ところで、こうした里の自然と生活文化の結び目となっているのは、言うまでもなくその地に暮らす人々である。里の自然と生活文化の多様性は、その地に暮らす人々の暮らしや労働の在り方の多様性へとつながり、生物多様性のみならず、人間多様性をも育んでいるのだ。筆者自身、田舎に行くほどおもしろいことをしている人が多いな、おもしろい考え方をする人が多いな、と感じることがよくある。それはこうしたことに由来しているのかもしれない。

筆者は以前、宮城県の蕪栗沼や伊豆沼で環境保護活動を展開している呉地正行さんから農村での環境づくりについて数多くのことを学ばせていただいた。

彼は今も危機的な状況にある伊豆沼での環境活動に取り組んでいるが、その彼が「環境運動でも地域作りでも、生物多様性はもちろん重要だが、実際の行動を生み出すには『人間多様性』こそ大切なんだ」と熱く語ってくれたのを改めて思い出される。こうした方々との出会いは、多様で多元的な価値を伴って新しい地域作りができる潜在的な可能性が東北の農山村にこそ存在しているのではないかと筆者に思わせる。

それだけではない。昨今の農山村での暮らしを見直す動きは、都市住民との交流を促進させており、彼らはさまざまな体験や里の生産物を求めて農村を訪れるようになった。また、特に山形県においては文化的背景を異にする数多くの海外出身の花嫁が暮らしているという実態があり、ただでさえ高い「人間多様性」がさらに高まっていると言える。

確かに、農山村は激しい過疎化と少子化で厳しい現状にある。多様な人間が力を合わせていくのは、かなり面倒なことで、なかなか一筋縄ではいかないものでもある。しかし、だからこそ、達成された成果は多くの人々にとって貴重なものとなるはずだ。いずれにしろ、新たな「人間多様性」が新しい里の自然と生活文化を形成しようとしていることは確かなようだ。

そこに参加できるのは従来のように地元住民の限られた人々だけというわけではない。多様な人々の参画の下で、次世代へつなぐ日本のふるさとの自然と文化が創られることを願ってやまない。